㈢ 休場付近崩壊の地形地質（木ノ内南も含む）

「歴史は繰り返す」の諺は災害にもあてはまる。後記の「半田町史」等記載の崩壊を現地形・地質から判断して図化すると次のとおり。

図示のように三波川変成層の上の洪積世層と赤土層からなる断面をもち、降雨は母岩の上に地下水となって滲み込み滑液となって表土をすべりやすくする。神宮寺下の道路脇の山地はいつも地下水が出ている。降雨の際は一層激しくなる。故に最も重要なことは排水設備の完全化である。そうでないと災害は繰りかえす危険性を孕んでいる。

この歴史的事実はわれわれに何を教えるか。結論的にいうと「道路建設は交通を便利にすると同時に、人災を起こす危険性を孕んでいる。故に道路建設と排水溝は同時建設でなければならないということは、土木工事の鉄則である」ということでなかろうか。

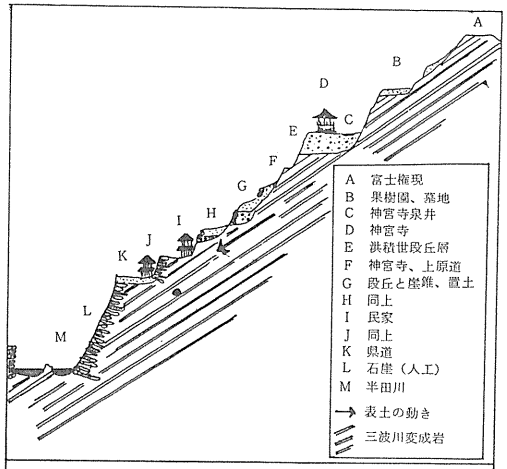
五　「半田町史」に記録の災害

「半田町史」の災害（崩壊）について、その記録を一部簡略して再掲しておく。

㈠ 増屋の前、崩壊

休場の神宮寺坂の左手に小谷がある。この谷が半田村と半田口山村との境である。半田村分に一軒の菓子屋増屋という大久保駒三郎翁の家があった。

明治十五年の大雨に増屋の前後に大亀裂が生じ、だんだん拡がって崩壊しはじめた。篠衝く雨の中に神宮寺の鐘が鳴り出した。村内非常召集である。午後三時頃グラグラと四、五反（四、五〇a）ばかりの石垣も大木も根こそぎ下の半田川に崩れ込んだ。家は手当して免がれた。山崩れというので美馬郡役所から、半田出身仲店の大久保忠三郎が検分にきた。洋服に八字口鬚・巻煙草を吹かし洋服を着ていた。村民は仲店は偉い人になったものじゃと賞めていた。



木ノ内南・休場付近の東西断面図

㈡ 和泉屋坂くずれる

増屋の隣家に蒟蒻・豆腐商の玉屋孫兵衛家、原木荒物店前田荘蔵家（妻はミシン二台で足袋の仕立を行う）今の和泉屋（前田家）があった。和泉屋の裏手の山から四軒屋口へかけて、神宮寺からの山水が地層に浸み込んで大亀裂（原文破裂）をはじめた。明治二十一年（月日不記）である。この時も半鐘が鳴って大勢集合防御工事をした。それは下の谷の縁りを壊して石垣をたたみ、しばらくして大事にいたらなかった。

思うに神宮寺山の地層は一帯に岩壁にてその上に僅かの土壌があるらしく、しばしば山崩れをくりかえし、幸いに樹根・草根のためからみあっているものの、寺の樹木を伐りすぎると何時の世にかは崩壊するものと、下に住む諸氏は予感しなくては不覚をとるであろう。

和泉屋坂とは屋号をそのままつけたもので、昔は四五度くらいの急坂であった。この坂から長井泰蔵家まで一軒の家もない断崖絶壁で危険な場所であった。明治十二年くらいまではたった四軒の家が山手に沿ってあったので四軒屋と名付けられた。雑貨商の大島関蔵、古着屋の木ノ内屋、素麺屋の伊沢屋、イリコ屋の長井泰蔵家の四軒。明治二十年時代から段々と家が建てられ、沖田金物・米沢店・対馬屋・吉本屋の諸家は最も新しい家々である。

四軒屋の前の崖からみると半田川中に赤岩・オンビキ岩・夫婦岩等があり、水量も今日の倍ぐらいあり、深さ一間（一・八m）から二間（三・六m）くらいある淵がところどころにあった。後に段々と大岩は破砕したり、石垣用に拾ったりして昔を語る岩や深淵はなくなった。

半田川も明治元年から約一間（一・八m）も掘れ込んでいると古老は語っている。　（注）別巻部落小誌木ノ内一五七頁参照

㈢ 休場の崩壊

大正元年（一九一二）八月二十一日、暴風雨の夜半、富士権現下の山麓が高さ一〇m、幅一〇mにわたって崩壊、住家三棟が土砂に押しつぶされ金沢与平は倒壊家屋の下敷きとなったが後負傷救出。道路は崩壊土で埋没、村民総出で埋没物土砂の除去作業に当たった。ただし崩壊のあとは、公費では何の施設もしてくれなかった由である。（現今の政治と全く異なる）

(3) 年別救急状況

区分 / 年別	出動回数	救急件数	搬送人員	事故別救急件数											
				火災事故	風水害事故	水難事故	交通事故	労働災害事故	運動競技事故	犯罪事故	自損行為	一般負傷	急病	その他
昭和48年	155	118	132	1		2	33	1			2	16	59	4
49年	190	152	156			1	31	2	2		6	21	84	5
50年	210	180	207		1	2	46	2			2	27	74	26
51年	227	198	204	0	1	2	38	5	2	2	7	32	97	12

第三節 災 害

半田町は北は吉野川が東西に流れ、川中に中鳥という部落があり（現美馬町）、ここは吉野川の大洪水ごとに、ほとんど全島の田畑も住家も毎年二、三回の浸水にあった。

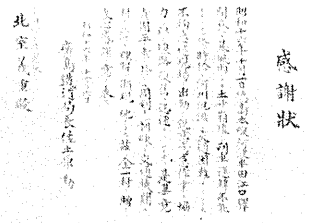
また、吉野川と半田川の合流地区もその度に浸水した。

半田川は急流で崖が高いから、洪水による浸水面積はわりあい少ないが、その代わり山分は県下でも有名な地辷り地帯で大雨・長雨による山崩れ崖崩れが年々起こらぬ年はない。

（注）自然編参照

風害も多く山岳の複雑な屈折から、樹木家屋を倒壊したことが多かった。しかし、これらに対し人間の力があまりにも貧弱なので、これを天災とあきらめていた。

風水害に対し防護の施設に着手したのは明治以後のことであり、大々的に企画したのは太平洋戦後昭和三十年以後のことである。



風水害出動に対する感謝状（昭16）

一 半田町の風水害

半田町における風水害を資料に基づいて年代順に列挙する。

半田町風水害年表

年号	紀元	月日	発生・被害の状況	原拠
延暦二一年	八〇二		風水害あり。紀伊・淡路・阿波・讃岐等一〇国、田を損し百姓の負税を免ず	類聚国史
貞観 八年	八六六	四・一	尾張・阿波両国風浪、百姓飢饉、尾張正税稲六万束、阿波国八万束を借し、民を救う	三代実録
仁和 二年	八八六	四・七	吉野川大洪水	毎日新聞「吉野川」
承徳 二年	一〇九八	八・八	暴風雨にて阿波一面の洪水となり、此時八田村破れて一の島となる	麻殖氏系譜
天文 二年	一五三三	九・一六	毛田地区の吉野川流水激しく船頭遭難、ために幟を献納し、船航路の安全を祈る	部落小誌
天正 七年	一五七九	八・一	吉野川水さらぬこと三日間、疾病流行、餓死者多し	県史
〃 一〇年	一五八二	九・五	阿波国大洪水、この頃より氾濫のたびに吉野川は中鳥の南を流れることもあった	〃
〃 一一年	一五八三		吉野川大洪水あり	〃
〃 一二年	一五八四	一一・二九	吉野川大洪水	〃
天和 三年	一六八三	四・一	旱害・水害について補助法を布達する	〃
元禄 元年	一六八八	六・一	台風、中須賀・中鳥大被害	〃
〃 一四年	一七〇一	七・一〇～三	舞中島全戸流失	〃
		八・一六	吉野川洪水	〃
〃 一六年	一七〇三	八・一〇～一五	阿波国大風雨、九一、九五五石損失、流家九九戸、流死九人、馬三四頭	〃
正徳 二年	一七一二		大洪水にて吉野川中鳥の南側を流れる	〃
享保 六年	一七二一	六・八	阿波国風雨洪水につき九一、九五五石損乏す	〃
〃 七年	一七二二	六・二三	大洪水、吉野川本流中鳥の南を流れる兆、愈々大となる	毎日新聞「吉野川」
			阿波国中風雨大洪水につき 八三、三七五石減収	県史

享保	七年	一七二二	七・一〇	阿波国風雨大洪水につき　五三、六一〇石減収
〃	一一年	一七二六	八・二三	〃　三七、五六六石減収
〃	一三年	一七二八		阿波国大水、農作被害九四、一五〇石
〃	一四年	一七二九	九・一四	阿波国大水、農作物被害二三万石（県史一七四、三〇〇石）
〃	一六年	一七三一		阿波国暴風雨、農作物被害一二七、〇五九石
〃	一九年	一七三四		中鳥に水入り殊の外大荒れ
元文	三年	一七三八	六・二六	洪水、吉野川河堤決潰
寛保	元年	一七四一		風雨出水につき九〇、二六九石減収
宝暦	六年	一七五六	六・九	台風あり、この頃例年災害
〃	七年	一七五七		阿波国、風雨・洪水、九二、一四〇石減収
明和	二年	一七六五	四・一五	吉野川大水、八月長雨
〃	八年	一七七一	八・二〇～二三	大洪水、木ノ内島浸水、谷水古今大水也
〃	九年	一七七二	八・二〇～二三	大水、坂の内、小谷大荒れ木ノ内島深く浸水、田畑大損
安永	三年	一七七四		阿波国、台風　一一七、九八一石減収、八六人死亡
〃	四年	一七七五		夏と秋に洪水
天明	元年	一七八一		天明、寛政にかけて洪水毎年の如し
〃	二年	一七八二	五・五	天明の洪水のため八〇、一六四石減収
				暴風雨・大水、徳島地方殊の外大水　阿波国一九万石余損亡
〃	五年	一七八五	七・八～一三	八一、七五七石減収―天明七年にかけて連年洪水
				中郡一帯氷降り申候、続いて大風雨大出水、下島中須賀が高水入、芋・高きび不残流失、あと大荒れ川成り大いたみ也
〃	六年	一七八六	四・二八	大洪水、これより引続き飢饉に相成候
			八・二九	台風、家々少々ずつ被害を受く、南地煙草全滅
			九・六	朝より七日暮まで無止大雨にて大水
			三・一七	雨降り出し、四月六日まで降る、大飢饉となる
			四・二三	二七日まで大水、中須賀、その余の島の芋、秋毛不残流失
〃	七年	一七八七		出水につき阿波国一四八、四五〇石減収

				県　史
				〃
				阿　波　志
				県　史
				毎日新聞「吉野川」
				阿　波　志
				兵助日記
				〃
				県　史
				毎日新聞「吉野川」
				県　史
				兵助日記
				〃
				県　史
				毎日新聞「吉野川」
				県　史
				兵助日記
				県　史
				兵助日記
				〃
				〃
				〃
				〃
				県　史

天明	八年	一七八八	八・二～一四	台風があったらしい（半田の記録にはない）
寛政	二年	一七九〇	八・五	風雨激しい
〃	四年	一七九二	七・二六	古今未曽有の大水出る、小谷山の樵木数石流る、松生持宝院の下屋敷一円を荷揚場としていたが残らず流れ損ず。吉野川より逆流し、村人数百人不残拾いかたぐ、結城玄活老の道より下の坂本八蔵の座上二尺八寸
〃	七年	一七九五		阿波国風雨出水　一三一、六〇七石損失
〃	一一年	一七九九	八・一九	阿波国風雨出水　四六、八五七石減収
享和	元年	一八〇一		風雨出水につき立毛損亡、貧民口糊に苦しむ
〃	二年	一八〇二	七・二六	夜大雨大水
文化	元年	一八〇四	八・二九	風雨出水、潰家流家一、五八六戸（阿波全体）
〃	五年	一八〇八	六・二九	大暴風雨、古今絶無、半田村倒壊家屋一〇軒、諸木大いに吹き倒される
〃	六年	一八〇九	七・七	雷雨　一名死亡（小野）
〃	九年	一八一二		阿波国風水害のため一三七、六〇二石減収
〃	一〇年	一八一三	八・四	大水
〃	一二年	一八一五	七・七	谷水大水、治五郎橋の永代橋流失、人々落胆　阿波国、風水害で五五、九三九石減収
〃	一三年	一八一六		この秋たびたび風雨出水有　県下一六三、二一二石減収
〃	一四年	一八一七		阿波国、風水害による減収　二七、三三〇石
文政	三年	一八二〇	六・晦日	大洪水、阿波国八七、〇三〇石減収
〃	六年	一八二三	八・	台風・大洪水
〃	一一年	一八二八	八・	暴風雨・風水害、虫害にて阿波国一八八、〇九七石減収
〃	一二年	一八二九	秋	丑の年の大洪水
天保	五年	一八三四	八・五～六	暴風雨、一軒吹き倒れ、桐の木多く吹き倒される
〃	六年	一八三五	七・六	朝五ツ時より雨風吹き出し正八ツ時迄風雨する
			七・二一	朝五ツ時より雨降り出し、四ツまでまた中の洪水
				阿波国、長雨あり風水害のため一三〇、八一八石減収
〃	七年	一八三六	六・八～七・八	連日長雨大凶作

				兵助日記
				県　史
				〃
				小浜家記録
				徳島県の歴史
				兵助日記
				〃
				県　史
				〃
				兵助日記
				県　史
				県　史
				〃
				兵助日記
				毎日新聞「吉野川」
				県　史
				〃
				兵助日記
				〃
				兵助日記
				県　史
				毎日新聞「吉野川」

天保	七年	一八三六	八・五～八・一四	三、四日連日雨のため大水 三日連雨、寸陰も止むなしの大降也、十三日八ツ時より出水、十四日大水	兵助日記
〃	八年	一八三七	二・五～二六	二日晴天有之候ては一日一夜雨、また二日降候故に田麦、土深き地の麦は根ぐさり	〃
			三・五	二月以来尚連雨続く、田麦所々くさる	〃
			八・二三	五七日の間雨降大水	〃
			一〇・一三	雨止まず二、三日晴天、一日一夜降り、一日天気にては一夜降り、九月中旬より今日まで雨天続く	〃
〃	九年	一八三八	六・三～六	土用長雨と世上言う也	〃
			六・一一～一三	十一日朝より雨降り出し、大降り、風強くなる	〃
			六・二〇	土用中雨天打続き	〃
〃	一〇年	一八三九	三・一五	この頃毎日雨天続きに候	〃
			四・一五～五・三	四月二十七、八、九日の三日不分昼夜大降也、麦刈干してぬらし、大損人多し	〃
			六・二〇	六月二十日より雨降り出し、七ツ下刻まで大風雨也、吉野川少々洪水	〃
			八・八～九	八日朝四ツ時より降り出し、暮方に至り候も不止、寸陰も止むなし翌九日も本降りに相成居申所、厳敷く降り続き、谷水古今稀成る大水（以下別巻兵助日記九七一頁参照）	〃
〃	一一年	一八四〇	八・一七	半田奥山坂根名、山伏義正家山崩れ掛り、二人の子供死す	〃
			六・二九～七・一	三日間矢張り雨天ニ而諸人大ニ気配	〃
				八月十五日頃より雨降り出し、四、五日天気にては一夜または一日雨也、一日天気にては一夜雨なり	〃
〃	一三年	一八四二	六・二〇～三五	春以来雨多く困り入り候、土用中七日雨天	〃
〃	一四年	一八四三	七・七	吉野川大洪水、徳島前代未聞の大水也、天保亥年八月の木ノ内の大水と同じである	毎日新聞「吉野川」兵助日記
				七月五、六日の昼夜大雨、七夕水という	〃
弘化	三年	一八四六	七・九	大雨降り西の谷（半田川）大川（吉野川）大水	〃
〃	四年	一八四七	七・一四	夜中より大雨、西の谷大水、木ノ内御問屋、中店の家内へ入水（座上）奥山谷筋（八千代地区）大損害有	敷太家記録

嘉永	二年	一八四九	八・	吉野川大洪水	毎日新聞「吉野川」
〃	三年	一八五〇	七・八	酉の年の大水、城下（徳島）にあふれる	小浜家記録
			七・九	九ツ時より雨降り出し、十日は大風大雨	敷太家記録
			七・一二	吉野川大洪水、毛田・高篠・一宇被害あり	毎日新聞「吉野川」
			七・六～七	大水	敷太家記録
〃	五年	一八五二	九・三	暁八ツ時より大雨大風、小谷（半田川）大荒れ吉野川大洪水	〃
			七・二一	子の大水	小浜家記録
			八・三	二日夜中より大雨となる	堺屋記録
〃	六年	一八五三	七・二一	暴風雨	敷太家記録
			八・二～四	大雨	〃
〃	七年	一八五四	七・一四	中須賀不残入水	小浜家記録
安政	二年	一八五五	七・一三	野分けの模様であったが夕方より風雨共に初まり十分の降雨有	敷太家記録
〃	三年	一八五六	七・一四	大雨	堺屋記録
〃	四年	一八五七	七・一	半田口山祖父江家倒壊、折之助妻負傷、牛頭天王大木倒壊、西地、家三軒つぶれる 口山村にて家一九軒流失	敷太家記録
〃	五年	一八五八	七・二九～八・一	吉野川大洪水（八朔水）江口にて四軒流れる、六〇年来の大水也	小浜家記録
〃	六年	一八五九	六・二八～二九	大水、中須賀無残入る	〃
			四・一〇	吉野川大水、箸蔵寺参詣（徳島の人）中鳥の南にて石に当たり破舟、三〇人のうち二四人溺死、前代未聞の死人也	〃
万延	元年	一八六〇	六・五	出水、中須賀七分の入水	〃
			六・一三	大水、中須賀無残入る	〃
			四・八	出水、椋の木（半田川河口右岸に生育）二尺位つかる	〃
			五・一一	出水、中須賀北の岸少しのこる	〃
			四、五月	連雨、麦こなす日和なし	〃
			五・一五～一六	大雨・出水	〃
文久	元年	一八六一	八・四	出水	〃
			七・二二	出水、中須賀東端水入、土佐水也	〃

文久二年	一八六二	七・一四	中須賀東地南地入る	堺屋記録
〃		八・一〇	出水、七月十四日より一尺高し	〃
〃		八・一七	出水、八月十日に同じ	〃
〃		閏八・一一	大水、中塚無残入、椋の木の枝つかる	〃
〃	三年	二・九	出水、中須賀東地皆入る	〃
〃		七・三	中須賀無残入る	〃
元治	元年	七・一四	出水、中塚東の地、南の地皆入る	〃
慶応	元年	五・二一	大水、中塚無残入る、椋の木の枝一尺下まで入る	〃
		五・二九	出水、椋の木の根本まで入る	〃
〃	二年	閏五・二九	出水、中塚東地・南地無残入る	〃
		七・一	前代未聞の大水、中須賀無残入る	〃
		七・八	大水、中須賀大痛み	〃
		七・一五	大水、中須賀大痛み	〃
〃	四年	八・五	連日豪雨、この年阿波国、一二八、八六〇石減収	県　史
明治	三年	八・一～二	大水、中須賀無残入る	堺屋記録
		九・七～九	大水、明治元年より水高し、中塚無残入る、大痛み、当半田島全部入る	〃
〃	四年	五・一八	中塚無残入る、去年九月より三尺低し	〃
〃	六年	八・一二	朝五ツ―四ツ辰巳の刻、常夜灯のある所まで入る、結城家門前の道まで入る、坂本役七宅座上一尺、中須賀の田地より一丈（約三m）高く入る、前代未聞の大水也、県下の川筋流家多し	〃
〃	七年	一〇・三	吉野川大洪水	毎日新聞「吉野川」
〃	九年	六・一九～二三	大水、中須賀無残入る	堺屋記録
〃	一三年	九・一三	風雨・出水	県警察史
〃	一五年	八・二四～二五	風雨・出水	〃
〃	一八八二	八・五	風雨・出水	〃
〃	一六年	九・一〇～一三	風雨・出水	〃

明治一七年	一八八四	一〇・七	風雨、出水	県警察史
〃	一八年	閏五・五～六	中須賀無残水入る	堺屋記録
〃	一八八五	八・二六	台風、県下の流失家屋七九戸	毎日新聞「吉野川」
〃	一九年	七・一	吉野川降雨連続のため大洪水	〃
〃	一八八六	七・二二	大水、中塚無残水入る	堺屋記録
〃	二〇年	九・一一	暴風雨	県　史
〃	一八八七	一一・二〇	台風四国に上陸、本州を縦断して太平洋に抜ける	〃
〃	一八八八	八・一九	暴風雨あり	毎日新聞「吉野川」
〃	二二年	九・四	暴風雨	県　史
〃	一八八九	七・二五	県下、大暴風雨	〃
〃	二四年	九・一	県下、大雨・諸川洪水	毎日新聞「吉野川」
〃	一八九一	八・六	豪雨	県　史
〃	二五年	一〇・一四	暴風	〃
〃	一八九二	九・一〇～一二	風雨・出水	県警察史
〃	二六年	八・二二	台風、半田木之内神宮寺山麓、半田川岸大崩壊道路不通	県　史
〃	一八九三	一〇・二	吉野川大洪水（七・二六m増水）	〃
〃	二七年	九・二七	大水	〃
〃	二八年	九・三〇	吉野川大洪水　（四・一三m）増水	〃
〃	一八九四	八・一	〃　（七・七六m）増水	〃
〃	二九年	九・三	〃　（一一・六五m）増水	〃
〃	一八九五	七・五	〃　（八・二五m）増水	〃
〃	二九年	九・二八	〃　（五・六一m）増水	〃
〃	一八九六	九・三〇	〃　（九・九〇m）増水	〃
〃	三〇年	九・八	〃　（六・五九m）増水	〃
〃	一八九七	七・九	〃　（五・七八m）増水	〃
〃	三一年	七・一三	〃　（九・五〇m）増水	〃
〃	一八九八	八・一七		
〃	三二年			
〃	一八九九			
〃	三三年			
〃	一九〇〇			
〃	三四年			
〃	一九〇一			
〃	三五年			
〃	一九〇二			
〃	三六年			
〃	一九〇三			
〃	三七年			
〃	一九〇四			
〃	三八年			
〃	一九〇五			

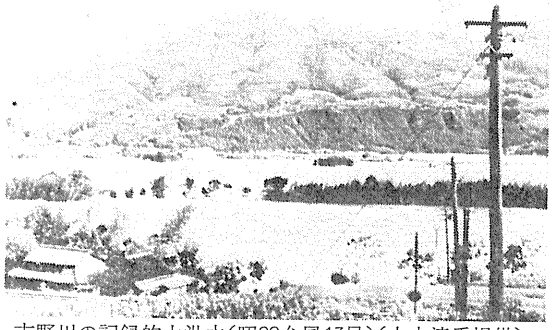
明治三九年	一九〇六	八・二六	吉野川大洪水	（四・七九m）増水
〃　四〇年	一九〇七	一一・一三	台風九州南部近海をあらす	
〃　四一年	一九〇八	八・七	吉野川大洪水（一〇・五六m）増水	
〃　四二年	一九〇九	九・二〇	〃	（六・九三m）増水
〃　四三年	一九一〇	九・七	〃	（五・三八m）増水
〃　四四年	一九一一	八・一六	〃	（八・二五m）増水
大正　元年	一九一二	八・二一	〃	（一一・六八m）増水（土佐水）
〃　二年	一九一三	九・二三	大風雨、半田休場神宮寺下山麓崩壊家屋三軒倒壊負傷男一名	
〃　三年	一九一四	六・一六	吉野川大洪水（一一・七二m）増水	
〃　四年	一九一五	八・二六	〃	（五・二八m）増水
〃　五年	一九一六	一〇・八	〃	（七・五九m）増水
〃　六年	一九一七	九・二四	台風、大洪水、西からの風で稲全滅に近い被害（九・七四m）増水	
		四・一五	吉野川大水（六・四七m）増水	
		四・二八	台風、日本海を通過、北海道上陸	
〃　七年	一九一八	一〇・一一	台風、九州南部より四国・近畿・中部・東北を縦断	
		七・一二	吉野川大水	（七・四三m）増水
		八・二九	〃	（一一・二二m）増水
〃　八年	一九一九	九・一四	大水、鹿老渡橋流失する	
〃　九年	一九二〇	七・二五	吉野川大水	（八・二五m）増水
〃　一〇年	一九二一	四・三	〃	（一〇・八九m）増水
〃　一一年	一九二二	七・五	吉野川出水	（七・五九m）増水
〃　一二年	一九二三	八・三一	吉野川大洪水	（九・〇八m）増水
〃　一三年	一九二四	一〇・八	〃	（九・二四m）増水
〃　一四年	一九二五	九・一八	吉野川出水	（七・七六m）増水
〃　一五年	一九二六	七・七	吉野川大水	（八・八一m）増水
昭和　二年	一九二七	九・三〇	〃	（七・一〇m）増水
			〃	（二・八八m）増水

昭和　三年	一九二八	八・三〇	吉野川大水	（八・四二m）増水
〃　四年	一九二九	七・二	〃	（五・九四m）増水
〃　五年	一九三〇	八・一三	吉野川大洪水	（九・二四m）増水
〃　六年	一九三一	五・一六	吉野川大出水	（七・五九m）増水
〃　七年	一九三二	七・二	〃	（七・五九m）増水
〃　八年	一九三三	八・四	〃	（七・四三m）増水
〃　九年	一九三四	九・二一	室戸台風（第一）最大風速三六・七m、吉野川大洪水（一一・二二m）増水	
〃　一〇年	一九三五	八・二八	吉野川大洪水（一〇・七三m）増水	
〃　一一年	一九三六	七・二三	〃	（八・五八m）増水
〃　一二年	一九三七	九・一一	台風、最大風速三二・二m、吉野川大洪水（一〇・四〇m）増水	
〃　一三年	一九三八	九・五	台風、最大風速二九・三m、吉野川大洪水（一〇・二三m）増水	
〃　一四年	一九三九	一〇・一七	吉野川大水	（六・六〇m）増水
〃　一五年	一九四〇	九・一二	〃	（八・一五m）増水
〃　一六年	一九四一	七・二六	〃	（八・二〇m）増水
		八・一五	一四号台風、最大風速三七・八m	
〃　一七年	一九四二	一〇・一	国鉄阿波半田～江口間土砂崩壊線路不通	
		七・二七	吉野川大洪水　（九・五〇m）増水	
		八・二七	台風、最大風速二九・八m	
		九・二七	台風	
〃　一八年	一九四三	七・二五	吉野川出水	（八・七〇m）増水
〃　一九年	一九四四	九・一七	〃	（八・一〇m）増水
〃　二〇年	一九四五	九・一七～一八	吉野川大洪水（一一・五〇m）増水、枕崎台風襲来、最大風速二九・三m半田町・八千代村倒壊家屋一七戸	
〃　二一年	一九四六	七・三〇	吉野川大洪水（一〇・四〇m）増水	
〃　二二年	一九四七	七・一〇	吉野川大水	（八・八〇m）増水
		九・一四	キャスリン台風	
〃　二三年	一九四八	八・二七	吉野川大洪水	（九・〇〇m）増水

前田秀夫家記録

徳島県の歴史

昭和二四年	一九四九	七・三〜三	デラ台風、県北地方を荒らす。井川谷集中豪雨（六〇〇㎜の降雨）井川谷、流失家屋九戸、死亡行方不明二名、牛流失死亡四頭、橋流失三、山崩壊三か所、共同水車一流失、佐古戸の谷山津波、人家崩壊、県道流失崩壊
〃　二五年	一九五〇	九・六 九・一三	ジェーン台風、吉野川出水 キジヤ台風、吉野川出水（八・七〇m）増水
〃　二六年	一九五一	七・二	ケイト台風、吉野川出水（八・二〇m）増水
〃　二七年	一九五二	六・二三	ダイナ台風、吉野川出水（六・一〇m）増水
〃　二八年	一九五三	一〇・一四 六・一五 九・二五	ルース台風（最大瞬間風速三九・三m） 台風第二号―県下被害総額一〇億円 吉野川大洪水（九・〇〇m）増水
〃　二九年	一九五四	九・一四	台風一三号 吉野川大洪水（一三・五〇m）増水
〃　三〇年	一九五五	九・二六〜二七 九・一二	台風一五号、東日本北海道直撃、最大風速三〇・二m、吉野川記録的大洪水、半田法師久保の斎藤庄三郎家倒壊 吉野川大出水（七・九〇m）増水
〃　三一年	一九五六	九・二九 九・一〇	台風第二二号 第一二号台風、吉野川出水（四・六〇m）増水
〃　三二年	一九五七	九・七	吉野川大洪水（九・三〇m）増水
〃　三三年	一九五八	九・二六	台風二二号
〃　三四年	一九五九	九・二七	台風一五号（伊勢湾台風）、吉野川出水（四・九〇m）増水、曽我谷大師堂と本尊吹き倒される
昭和三五年	一九六〇	八・二九	吉野川出水（七・五〇m）増水
〃　三六年	一九六一	九・一五〜一六 九・一六	台風 台風一八号（第二室戸台風）最大瞬間風速三八・〇m 吉野川大洪水（一〇・四〇m）増水
〃　三七年	一九六二	六・一〇	吉野川出水（四・四五m）増水
〃　三八年	一九六三	四・一 五・一	連日、雨・霧のため麦穂腐る
〃　三九年	一九六四	八・一〇	中旬より豪雨
〃　四〇年	一九六五	一〇・二五	吉野川大洪水（九・八〇m）増水
〃　四一年	一九六六	九・一〇 九・二六	台風二〇号（最大瞬間風速四九・五m）増水 台風二三号（最大風速三五・八m、最大瞬間風速六七・〇m）
〃　四四年	一九六九	八・一	台風二六号
〃　四五年	一九七〇	八・二一	台風
〃　四七年	一九七二	七・五	台風一〇号高知に上陸、長野谷山津波的氾濫、死亡一名、行方不明一名、長野地区地辺り、三〇haの山地・耕地・人家三戸辺る
〃　四九年	一九七四	九・一	集中豪雨（高知県繁藤地区六〇名死亡）
〃　五〇年	一九七五	八・一七	台風一八号、美馬・三好浸水家屋四六〇戸、耕地冠水一、一九七ha 青石潜水橋北側四八m流失
		八・二二	台風五号、青石潜水橋再度流失八四m、この台風のため、長野・日谷尾地区地辺り開始、一日一〇cm以上。長野地区の下地域が特に動く。日谷尾では地辺り防止のコンクリート擁壁無残に破壊され、人家耕地等亀裂多し 台風六号、大洪水、特に大惣・小谷・樫尾地区の降水量大。樫尾、宮田基春宅裏山崩壊　宮田基春死亡、母・妻負傷、蔭名東尾地区、馬越上流崩壊
〃　五一年	一九七六	五・二二 六・三〇 九・八〜一三	梅雨期集中豪雨により川又釜土地区崩壊 梅雨期降雨のため中籔山下ヨシ子宅の東側擁壁崩壊、同氏埋没死亡 台風一七号、半田各地に大小の崩壊数十か所に及ぶ



吉野川の記録的大洪水（昭29台風13号）（山本清氏提供）

二　半田町の火災

古い記録などから、判明したものだけを年代順に列挙する。

半田町火災年表

年号	紀元	月日	発生・被害の状況	原拠
天正　年間	一五三～一六二		中熊にあった多聞寺、この頃、長宗我部の焼打ちにあったといわれている	前田正行家文書
宝永　八年	一七一一	一・二	逢坂、前田源蔵光康屋敷全焼、家臣ら三名焼死	〃
享保　九年	一七二四	一・二	木ノ内　前田源蔵光康居宅火災　家臣ら四名焼死	半田奥山村郷土誌
寛保　元年	一七四一	二・一四	上喜来多聞寺焼ける	部落小誌
〃　三年	一七四三		西久保滝宮神社の北側にあった神宮寺焼失	篠原重美家文書
宝暦一二年	一七六二		高清左衛門家火災	兵助日記
明和　三年	一七六六	七・一七	字東久保　神宮寺不残焼失	〃
享和　三年	一八〇三	三・二〇	夜、小野の横田万兵衛・大坂屋源兵衛・才太郎宅三軒焼失	〃
文化　四年	一八〇七	三・八	朝、赤目の亀兵・藤次宅二戸焼失	敷太家記録
〃　六年	一八〇九	七・七	小野、兵太郎下の甚之助宅、雷のため焼失	兵助日記
〃　七年	一八一〇	一〇・一	夜、半田村木ノ内　心学学舎「根心舎」焼失	〃
〃　一三年	一八一六	一二・二	朝、敷地大火事にて釜戸七軒焼失	〃
〃　一四年	一八一七	六・一四	夜、逢坂大火事。浅野房左衛門火元にて熊屋・加賀屋・三谷屋類焼計四軒焼失	〃
文政　三年	一八二〇	一・二一	暮六ツ時、小野、篠原亀三郎火元、その他一軒焼失	〃
〃　六年	一八二三	五・一六	六ツ時(五時～七時)、逢坂大火事。浅野房左衛門長屋より出火、田井屋・熊野・三谷屋・加賀屋、計五軒焼失	〃
安政　三年	一八五六	一一・一九	夜四ツ時、小野宇蔵宅焼失	敷太家記録
〃　五年	一八五八	一一・二九	夜五ツ時、北の熊蔵宅焼失(逢坂)	〃
		四・一九	田井名嶋吉火元一三軒焼失、逢坂地区へ飛火して、三軒計一六軒	〃

安政　六年	一八五九	六・一	小井野にて八戸一六棟を焼失	部落小誌
明治　七年	一八七四		春、上運七軒、翌日折坂八軒焼ける	〃
〃　一八年	一八八五		休場の半田村役所二階事務室から出火(現逢坂トヨ子氏宅)	半田町史
〃　二三年	一八九〇	一・二五	半田村田井の原田重次郎宅出火、この火災に際し、特に消火活動に尽力した岡本儀平に賞金が下賜された	岡本勇家賞状
〃　二八年	一八九五	八・二二	黒石の下部落大火災、井上・大上両家以外全戸焼失する	部落小誌
〃　三八年	一九〇五	八・一	上喜来多聞寺秋葉堂を残し外全部焼失	〃
〃　三九年	一九〇六	一・二〇	長瀬三戸六棟焼失	役場議決書
〃　四二年	一九〇九	五・三〇	村役場焼失(逢坂の田井屋田村源太郎家を借りてあった)	部落小誌
大正　二年	一九一三		馬越　住居一戸全焼	部落小誌
〃　七年	一九一八	七・一	高清東字山内　住居一戸全焼	〃
〃　八年	一九一九	四・一	猿飼　住居一戸焼失	〃
		冬	猿飼　住居三戸焼失	〃
〃　九年	一九二〇	三・一	坂根　新田神社全焼	新田神社棟札
〃　一〇年	一九二一		猿飼　住居三戸焼失	
〃　一二年	一九二三	七・二一	井川池の尻山井手大師堂全焼	
		一	井川池の尻住居一戸及び水車小屋全焼	
〃　一三年	一九二四	旧三・三〇	馬越　住居一戸全焼	
〃　一五年	一九二六	一	逢坂　住居一戸火災	
		一〇・二三	馬越　住居一戸全焼(一三年間に三回)	
昭和　三年	一九二八	一・二五	木ノ内　住居一戸火災全焼	
		四・一九	佐古戸　住居一棟焼失	
〃　六年	一九三一	四・一	曽我谷　住居一戸火災	
〃　七年	一九三二		白石ひきぎり五軒焼失	
〃　八年	一九三三		佐古戸　住居一戸火災	
〃　一四年	一九三九	一一・一八	折坂　住居一戸焼失	
			木ノ内　住居一戸全焼、倉庫一棟類焼	

昭和一六年	一九四一	夏	井川　山崎大師庵全焼	
〃　二二年	一九四七	四・三	字高清、下源蔵より出火、二時間余りで三つの丘を越え八戸焼失、八代の山伏家辺りまでも進んだが、山林を焼いて消火、幸い昼火事のため、怪我人はなかった	
〃　二七年	一九五二	三・二七	小野　八幡神社火災（本殿・幣殿・拝殿全焼）	
〃　二九年	一九五四	五・一	小井野　住居一戸焼失	
〃　三〇年	一九五五	四・六	下竹　住居一戸全焼	
		四・一五	蔭名　住居一戸全焼	
		六・一五	西久保　住居一戸全焼	
		一二・八	中熊　住居一戸、倉庫一棟全焼	
〃　三三年	一九五八	一・六	坂根　住居一戸全焼	
		二・八	折坂　住居一戸全焼	
		二・一七	白石　納屋一棟全焼	
		三・五	逢坂　住居一戸半焼	
		五・一一	紙屋　たばこ乾燥室一棟全焼	
		八・二五	折坂　たばこ乾燥室一棟全焼	
〃　三四年	一九五九	八・一	白石　住居一戸全焼	
〃　三五年	一九六〇	一一・一八	蔭名　住居一戸、納屋一棟全焼	
〃　三六年	一九六一	二・八	白石　住居一戸全焼	
		二・一二	上蓮　住居一戸、納屋一棟全焼	
		四・三〇	猿飼　住居一戸、倉庫一棟全焼	
〃　三七年	一九六二	六・二九	白石　住居一戸全焼	
		八・二九	折坂　住居二戸、物置納屋など全焼	
		九・一	下竹　山林火災	
		一〇・二	紙屋　住居一戸、物置など全焼	
		一一・五	下尾尻　住居一戸、納屋など全焼	
〃　三八年	一九六三	二・六	小谷　住居一戸全焼	
		三・二八	日浦　住居一戸全焼	

部落小誌

火災報告書（以下火災報告書による）

昭和三九年	一九六四	四・二三	佐古戸　住居一戸全焼
		七・一四	小野　店舗一部火災
		八・一一	高清　たばこ乾燥室一棟全焼
		八・二八	日開野　たばこ乾燥室半焼
〃　四〇年	一九六五	一〇・六	小野　住居一戸、納屋牛舎全焼
		一〇・九	中熊　住居一戸、養蚕室全焼
		一一・一六	中熊　住居一戸全焼
		一二・八	東久保　住居半焼、工場倉庫全焼
		一・九	白石　住居一戸全焼
		六・二九	田井　住居一戸全焼
		八・四	坂根　住居一戸全焼、納屋半焼
		二・一三	日浦　住居一戸、納屋ほか全焼
		二・二一	田井　物置半焼
〃　四一年	一九六六	三・一七	小野　住居一戸全焼
		八・三	小野　住居一戸全焼
		二・一九	下尾尻　住居一戸全焼
		二・二二	小谷　住居一戸全焼
		三・二〇	木ノ内　倉庫一棟全焼
〃　四二年	一九六七	一一・一三	下尾尻　住居一戸全焼
		四・一五	日開野　住居一戸全焼
		六・一一	平良石　住居一戸半焼
		一一・一	小谷　住居一戸全焼
		一二・五	小野　住居一戸全焼
		一二・一一	日開野　住居一戸全焼
		一二・二三	坂根　住居一戸全焼
〃　四三年	一九六八	四・九	葛城　住居および納屋全焼
		五・一六	日開野　住居一戸全焼

昭和四四年	一九六九	五・一六	上喜来　住居一戸全焼	
〃　四五年	一九七〇	五・二二	上喜来　物置一棟全焼	
		九・八	高清　住居および納屋全焼	
		九・二七	蔭名　納屋およびたばこ乾燥室全焼	
〃　四六年	一九七一	一・六	松生　牛舎および納屋半焼	
		五・三〇	小野　工場全焼	
		九・三	上喜来　住居一戸全焼	
		九・四	日浦　住居一戸全焼	
		一・一六	蔭名　住居一戸全焼	
		三・二	日開野　住居一戸全焼	
〃　四八年	一九七三	九・一八	折坂　住居一戸全焼	
		三・二四	小谷　住居一戸火災	
〃　四九年	一九七四	二・二八	西久保　会社事務所全焼	
		三・九	佐古戸　住居一戸火災	
		六・二二	小野　住居全焼	
〃　五〇年	一九七五	一・二五	葛城　住居一戸火災	

三　半田町の地震

本町において、地震のため大きな被害を受けたという記録はない。しかし、参考までに「徳島県史」その他の記録から、本県に関係のある地震で、判明しているものを年代順に列記する。

地震年表

年号	紀元	月日	発生の状況	原拠
天武天皇一二年	六八四	一〇・一四	土佐沖大地震	
天平　六年	七三四	六・　四	大地震	
正平一六年	一三六一	七・二四	南海道大地震、海部郡雪の湊一、七〇〇戸海に沈む	県史
天正一二年	一五八四	一一・二九	阿波国中大地震、土地の裂けること数か所	阿波志
慶長　九年	一六〇四	一二・一六	大地震あり	
寛永　四年	一六二七	一〇・　四	地震と津波あり	阿波志
元禄一六年	一七〇三	―	四海大地震七日七夜続く	
宝永　四年	一七〇七	一〇・　四	紀州沖大地震・津波・潰家・溺死人多し	阿波志
享保一三年	一七二八	九・　一	阿波国地震あり	県史
文政一一年	一八二八	一一・二二	大地震	〃
天保　二年	一八三一	―	京都大地震、半田では行燈の火消えたという	敷太家記録
嘉永　七年	一八五四	一一・　四	朝五ツ時（八時）地震あり	徳島県の歴史
		一一・　五	七ツ時（午前四時）より夕方まで何度も地震あり	敷太家記録
		一一・　六	九ツ時まで大小四回地震あり	〃
		一一・　七	朝より夕まで六、七度、夜中に五、六度あり	〃
		一一・一四	地震尚続く	県史
明治三八年	一九〇五	六・　三	強震あり	〃
昭和二一年	一九四六	一二・二四	南海大地震―津波と地盤沈下あり	〃
〃　三五年	一九六〇	五・二四	チリ地震　津波	

四　半田町の旱魃

半田町は（自然編参照）ほとんどの耕地が傾斜地で、谷川も深い崖の下を流れているため畑は耕土浅く保水率低く、田は潅漑水不足し毎年旱害にさいなまれた。特に飲料水の欠乏、甘藷・煙草の移植、人参等野菜の播種期の困苦は他地域の住民では推察し難い。この旱害に対して最初に救済の手を打ったのが大正元年の半田用水で、またこのお蔭で後年田井の田地も分水の恩恵を蒙った。飲料水の欠乏についてはビニールパイプの利用、

雨乞費用控え
嘉永6年(1853)
(大久保進氏提供)

各部落の組合による上水道の設備等が次第に行われて、その不便が解消されるようになった。「徳島県史」などの町外の記録、また「兵助日記」・「堺屋記録」・「敷太家記録」などの町内の記録をもとに旱魃の状況を列記してみる。

旱魃年表

年号	紀元	月日	発生の状況	原拠
寛永　九年	一六三二	一二・二七	旱害、御国奉行に憐愍を加うべき旨下命	県　史
〃　一九年	一六四二	—	旱害強し	〃
天和　三年	一六八三	四・—	旱害、水害について補助法を布達する	〃
宝永　八年 正徳　元年	一七一一	—	旱害のため飢饉	〃
〃　二年	一七一二	冬	旱害が続き、住民飢える	
享保　二年	一七一七	—	旱害	〃
〃　三年	一七一八	—	大旱害	〃
〃　一一年	一七二六	—	大旱害	〃
〃　一七年	一七三二	—	五〇年来の大飢饉（近世三大飢饉）	〃
明和三・四年	一七六六～六七	六月～七月	三年は一〇七、〇〇〇石・四年は七七、〇〇〇石損亡	年表秘録
明和　七年	一七七〇	五月～七月	雨降らず飢饉、旱害一三、一九〇石減収	県　史
安永　四年	一七七五	—	旱害	〃
〃　六年	一七七七	五・五～六・一七	旱害、太田立毛なし、諸人いたむ	兵助日記
天明　四年	一七八四	—	五、六年と三か年飢饉が続く	県　史
〃　七年	一七八七	六月上旬	祖谷山境峯筋一円、笹の実なり、山人飢饉につきこの実を取り食べる	兵助日記
寛政一〇年	一七九八	六月　迄	旱魃、国中難渋、願勝寺・三頭山にて雨乞い	〃
文化　三年	一八〇六	—	旱害のため阿淡にて一〇三、五二六石減収	県　史
〃　八年	一八一一	—	旱害のため阿淡にて八八、九〇一石減収	〃
〃　一〇年	一八一三	—	旱害・虫害のため阿淡にて五一、六五九石減収	〃
文政　六年	一八二三	五月～七月	大旱害にて井戸水不残枯れる、諸人難渋	兵助日記

文政　七年	一八二四	—	旱害	県　史
天保　三年	一八三二	—	旱害大、雨一向不降大に難渋	兵助日記
〃　四年	一八三三	—	旱害（四年から八年まで連続）	県　史
〃　八年	一八三七	—	極暑続く、雨乞いの声強くなる この月御上より時疫薬法の御触がある	兵助日記
〃　一〇年	一八三九	六月	降雨なく日やけ、琉球芋植付不能、水を担きて植付ける	〃
〃　一一年	一八四〇	七月	この頃天気打続き大日、旱魃各地にて雨乞い	〃
〃　一三年	一八四二	二月	昨年寒中より殊の外大干にて井戸の水所々なし	〃
弘化　三年	一八四六	夏	旱害住民大いに困る	敷太家記録
嘉永　五年	一八五二	四月～五月 六月	三〇日余雨少なく東の庵にて雨乞い 田井稲荷明神にて雨乞い、村中の大小の社堂残らず雨乞いするも雨降らず。猪尻役所より雨乞い祈禱するよう、御酒・灯明料二四匁当村へ下さる、雨降らず一村不残八幡宮へ揃い、当村神社回りの修行をする、先達は神宮寺住職、五人与小頭雨乞い相談をして六月二十四日～二十六日、竜王渕（木ノ内）に修行したが、雨降らず	〃
〃　六年	一八五三	七月	旱魃半田村民飲料水に苦しむ	〃
〃　七年	一八五四	九月	旱害雨乞い四度、やけ跡にそば蒔く	〃
安政　二年	一八五五	六月	大旱魃につき郡代猪尻役所より雨乞いをするよう仰付けられる	〃
〃　三年	一八五六	六月～八月	旱害、氏神々社にて雨乞い行事	〃
〃　四年	一八五七	六月	峠庵・八幡宮・神宮寺にて雨乞い	〃
文久　元年	一八六一	四月　六月	旱魃にて芋植え出来ず	〃
慶応　四年	一八六八	四月	旱害	〃
明治　五年	一八七二	六月	降雨なし	〃
〃　八年	一八七五	六月	旱害	〃
〃　九年	一八七六	六月末 八月上旬	この間旱魃、「徳あらば雲吹きおこせ秋の風□今の夕立」蔭名西尾家の碑	堺屋記録
〃　一三年	一八八〇	六月	旱魃	〃
〃　一六年	一八八三	—	大旱害、五三日間雨降らず	敷太家記録
〃　一七年	一八八四	四・五月	旱害	堺屋記録
				〃
				〃
				蔭の西尾家墓銘

明治一八年	一八八五	七月	大旱害	県　史
〃　一九年	一八八六	七月	旱害	〃
〃　二〇年	一八八七	旧六月	旧六月十五日夕立以後旱魃、諸方に雨乞すと雖も雨なし	結城家記録
〃　二一年	一八八八	九・一〇月	降雨なし	堺屋記録
〃　二六年	一八九三	六月	旱害	前田秀夫家記録
〃　二七年	一八九四	一〇月	旱害厳しかった	県　史
〃　三〇年	一八九七	八月	旱害、五六日間雨降らず	
〃　三七年	一九〇四	—	旱害、県下大凶作	
大正一四年	一九二五	九月	旱害、凶作減収三割二分	
昭和　二年	一九二七	七月	夏期大旱害・竜王祠（田井）・天狗岩雨乞	
〃　六年	一九三一	六～八月	夏旱害、諸作痛む	
〃　九年	一九三四	—	旱害	
〃　一〇年	一九三五	旧四月～七・二〇	夏期旱天続く	
〃　一四年	一九三九	夏期	春以来雨量なし、未曽有大旱魃作物枯死、旧七月十日初めて降雨	前田秀夫家記録
		—	半田町降雨なく、各地雨乞いを行う	
			大旱害	